

「先生が、何時何分に乗るのか教えてくれなかったもん！」

—なぜ、電車に乗らなかったのか—

NPO（特定非営利活動法人） ゆめ

竹上 道邦（元特別支援学級担任）

久しぶりに、特別支援学級の教え子や保護者と同窓会をしました。

話題が、学級で子どもたちと取り組んだ「乗車体験」の話になりました。

「先生、ぼく、いっぱいいっぱいたんやで！」（怒り）

「〇〇ちゃんと◇◇くんを連れて、『がんばれ！』なんて、無茶やと思った」

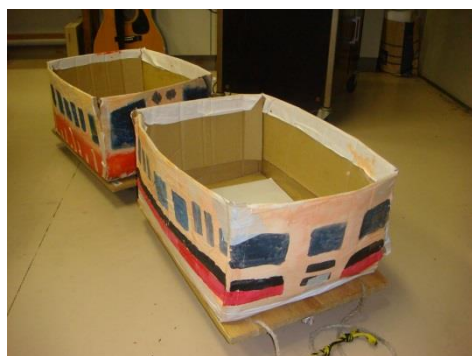
『まかした』と言われたけど、大変さをわかっていたのか！」（怒り）

当時、あまり強く自分を出すことなく、しゃべることが少なかった彼が、今は、まあ、ペラペラとよくしゃべるわ、しゃべるわ・・・

私は、学級での生活単元学習として、電車の体験学習を大事に毎年取り組んできました。学校の横を走っている山陽電車。子どもたちは電車が大好きです。交通機関の利用は、社会に出ての自立を考える時、とても大切と考えるからです。

「電車によって、自分たちで動物園に行こう！」という目標をみんなで共有し、楽しみに、電車の乗り方や電車の学習に取り組んでいきます。

当日は学校から仲間と出発です。担任はゴールまでいません。リーダーはみんなの世話をし、みんながリーダーを頼って・・・！



なぜ、乗らなかったのか？

ホームで隠れて見守ってくださっていたお母さんから、「先生、来た電車にのりません」と連絡。ホームで電車が来たのに、乗り過ごしてしまったそうです。

「あの時、先生は、何分に乗れと教えてくれなかったから・・・。」  
来た電車にのるであろうと思っていたけど、・・・

子どもたちは、教えてもらっていない状況に戸惑い、そして、自分たちで決め、みんなで次の電車にのったのだそうです。

あの時のみんなの姿が、目の前に浮かんできます。

「何分の電車、〇〇の電車の一番後ろ・・・。」など

もっともっと細かいプログラムを提示すべきだったのだろうか？

予期しない状況に、自分で考え、決める。仲間に頼られ、支え合い・・・

やりきって、3人で本当にうれしそうにゴールにやってきたのです。

「〇〇くんなら、きっと、できるだろうって、信じてたから」私

「まあね」〇〇くん

いろんな子どもたちに出会うたびに、教えられることがいっぱいです。